

# 卑劣な街

2007(平成19)年7月18日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★



監督＝ユ・ハ／出演＝チョ・インソン／チョン・ホジン／ナムグン・ミン／イ・ポヨン／ユン・ジェムン／チン・グ／ソヌ・ウンスク／ホ・イジェ／イ・シンソン／クォン・テウォン  
(エスピーオー配給／2006年韓国映画／140分)

……「第3回韓流シネマ・フェスティバル」最初の映画は、野心に燃える三流ヤクザの権力闘争をテーマとしたコレ。誰もが嫌がる現職検事の殺害を自ら買って出た彼は、以降順調にのし上がっていくかに見えたが……？ 面白いのは、29歳の同窓会で再会した映画監督志望の友人の登場。大ヒットした彼の映画はフィクション、それとも……？ 日本のヤクザ映画とは全く異質の切り口だが、何ゴトにもハードで徹底する韓国人気質を再確認しながら、ヤクザの空虚さを思い、タイトルの意味をじっくり味わいたいものだ。

## 第3回韓流シネマ・フェスティバルルネサンスの開幕！

2005年にはじめて開催された「韓流シネマ・フェスティバル」は、今年2007年で第3回を迎えた。大阪ではシネマート心斎橋で、8月25日から9月14日まで全21作が公開される。といっても、私がこの韓流シネマ・フェスティバルの試写を観るのは今回がはじめて。

私が韓流映画をまとめて観たのは「韓国映画セレクション2005 in ホクテンザ」の時で、2005年6月25日～7月29日の間に計14本を観た(『シネマルーム8』収録)。今回試写で予定されているのは『卑劣な街』をはじめとする3作品だが、随時宣伝用ビデオを借りて鑑賞し、紹介していきたい。

## 主人公は「野心に燃える三流ヤクザ」だが……

第3回韓流シネマ・フェスティバルのプレスシート(パンフレット)は、1冊に全21作が要領よく紹介されているが、各作品についての詳しい解説がないため、評論を

書くには資料不足。したがって、以下の私の評論には知識不足や誤解があるかもしれないが、それはご容赦を……。

この映画の主人公キム・ビョンドゥ（チョ・インソン）は「野心に燃える三流ヤクザ」と紹介され、またこの映画は、そんな主人公が「生きるか死ぬかの卑劣な世界で欲望に翻弄されるさまを、暴力描写満載で描く」と紹介されている。それはそれで的確な指摘だが、突っ込んで考えると、まず第1に、韓国におけるヤクザの実態が私には全くわからない。

日本では神戸・大阪における山口組の存在とその研究はかなり進んでいるし、東京での各ヤクザ組織もほぼ明らかになっている……？ また映画の世界でも、鶴田浩二や高倉健を代表とする任侠ヤクザ映画や広島戦争を描いた菅原文太や松方弘樹らのヤクザ実録路線を中心とし、高橋英樹の『男の紋章』シリーズ、藤純子の『緋牡丹博徒』シリーズなど多種多様のヤクザ映画があり、良くも悪くもヤクザ映画は日本映画の一翼を担うもの。しかし韓国では……？

私の知識不足かもしれないが、ヤクザ組織同士の凄惨な抗争を描いた映画や任侠道に生きるカッコいいヒーローを描いた映画はあまりないのでは……？ そう考えると、第2に韓国における一流ヤクザのイメージがないだけに、それと対比される二流・三流ヤクザもなかなかイメージできないのが日本人観客の現状では……？ したがって、ビョンドゥが子分たちに対して語る「任侠道とは」の講話（？）も、私には若干消化不良気味……？

## 焦点は組内部の権力闘争

日本のヤクザ映画は前述のとおりいくつかの基本パターンがあるが、三流ヤクザを主人公にしたこの映画の焦点は、組内部の権力闘争。韓国映画は名前がわかりにくいので、ここで少し私流に整理しておこう。

ヤクザ組織の黒幕は、一見穏健で紳士風のファン・ミヨンゲン会長（チョン・ホジン）。このファン会長は、ビョンドゥから言えばオヤジともいえるべき存在だ。次に組織の幹部でビョンドゥの兄貴分となっているのがノ・サン Chol（ユン・ジェムン）。ビョンドゥは三流ヤクザながら自分の子分を6人持っており、ビョンドゥの片腕的存在がチョンス（チン・グ）。

こういうヤクザ組織の縦の系列を理解したうえで、ファン会長が、目の上のたんこ

ぶとなっているパク部長検事（クオン・テウォン）の殺害をほのめかしたから、それに誰が食いつくのが最初の焦点に。現職検事をヤクザが殺害するのはヤバイ。ヤクザなら誰もがそう思うもの。サンチョルはその常識的な判断の枠を越えられなかったが、サンチョルのために一生懸命働いても子分たちを養っていく当面の費用にもコト欠くビョンドゥは、「ここは一発勝負を！」と覚悟せざるをえなかった……。

これは、あの織田信長が部下の武将たちにあれこれとテーマを与えて競わせたのと同じようなもの。すると、そのエサに食いつくのは譜代の武将ではなく、成り上がりの一攫千金を夢みる武将であるのは当然。したがって、ビョンドゥは若かりし頃の木下藤吉郎……？

## キム・ミノの監督役は出色！

この映画は2時間20分と長い。それは、一方で血みどろになってヤクザ内部の権力闘争にチャレンジするビョンドゥの姿を描く他、今は映画監督を目指して頑張っているキム・ミノ（ナムグン・ミン）とビョンドゥの初恋の女性で今は本屋に勤めているカン・ヒョンジュ（イ・ボヨン）という、2人の幼なじみの同級生を登場させて、物語に膨らみをもたせたため。

恋におちながら男がヤクザであることに苦しむ女性というのは、日本ではよくあるパターン。私が強く印象に残っているのは、中3か高1の時に観た吉永小百合、浜田光夫の純愛コンビによる『泥だらけの純情』（63年）。これは藤原審爾の原作を映画化したものだが、チンピラヤクザと深窓の令嬢との恋に胸をときめかすとともに、その悲劇的結末に涙したもの。その基本パターンを、ユ・ハ監督はこの映画で踏襲……？

他方、これは面白いと感心したのは、ミノの職業を映画監督としたこと。ヤクザ映画の企画を練りながら、「こんなリアリティのない脚本はダメだ」と突っ返されていたミノは、数年ぶりに再会したビョンドゥがヤクザであることを知り、次第にその内面に入り込んでいくことに……。そしてそれが、彼がリアリティに富むヤクザ映画完成への道を開くとともに、観客動員500万人、最優秀作品賞受賞（？）という輝かしい成果を生むことに……。しかし、そこに描かれたリアリティとは一体ナニ……？ それはフィクション、それとも現実……？ それが大問題……。

## 韓国では29歳で同窓会を……？

現在、日本では団塊世代をターゲットとした同窓会の企画が大ヒット中。高度経済成長時代を働きに働いて駆け抜け、やっとマイホームのローン支払いが終わったと思ったら、今度は年金不安……。そう思うと、今後も不安ばかりだが、何はともあれ、仕事の呪縛から解き放たれた団塊世代の皆様と同窓会で楽しいひとときを、という企画が受けるのは、私にもよく理解できる。現に私も、2007年4月阪大法学部の同窓会である「青雲会」の副会長に就任したし、愛光学園関西9期会では4カ月に1度会食しながら旧交を温めている次第。

ところがこの映画を観ると、ピョンドゥは29歳だから、大学を卒業して10年も経たないのに（ピョンドゥは大卒ではないが……）同窓会に20名近くが集まり、大いに盛り上がっていたことにビックリ。韓国ではホントにこんな年頃で同窓会をやる習慣があるの……？ それともこれは、この映画のストーリーづくりのための仕掛け……？

## 『マルチュク青春通り』 vs. 『卑劣な街』

この映画は、『ブラザーフード』（04年）に次いで2004年の年間興行収入2位に輝いた『マルチュク青春通り』のユ・ハ監督作品。プレスシートによれば、ユ・ハ監督は『マルチュク青春通り』でクォン・サンウを俳優開眼させたと書いているが、さてその真偽のほどは……？

他方プレスシートには、主人公ピョンドゥを演じたチョ・インソンは「これまでの貴公子のイメージを脱ぎ棄て、短い髪、野暮ったい格好、乱暴な言葉遣いと三流ヤクザのピョンドゥに成りきり、過激アクションにも体当たりで挑戦」と書いているが、こちらはそのとおり！

クォン・サンウの『マルチュク青春通り』は星3つと私の評価はまざまざのものだった（『シネマルーム8』35頁参照）。しかし、ちょっと無骨だが背が高くカッコいいチョ・インソンは、浜田光夫型のクォン・サンウと異なり、高橋英樹型で大きく成長する可能性あり、とみたが……。

## さすがヤクザ、高校生とはレベルが……

長瀬智也主演の昨年夏のテレビドラマ『マイ★ボス マイ★ヒーロー』は、韓国の

学園モノ映画『マイ・ボス マイ・ヒーロー』（01年）をモデルにしたものだった。韓国の学園モノ映画の特徴は、高校生のクセに殴る蹴るの派手なケンカを売りにしていること（その背景は『シネマルーム8』35頁に書いているのでそれを参照）。それは、『品行ゼロ』（02年）や『マルチュク青春通り』も全く同じ。

ところが、3月13日に観た『相棒 シティ・オブ・バイオレンス』（06年）は、それまでの日本のおばさま族をターゲットにした韓流純愛ドラマではなく、おじさん向けの韓流アクション映画。そして、そこで示された刑事やヤクザ達の格闘能力の高さはさすがプロというべきもので、高校生レベルとは大きく違うものだった（『シネマルーム14』305頁参照）。

『卑劣な街』の主人公は29歳の三流ヤクザだが、その体格の良さからも格闘能力は抜群。韓流アクションで目立つのは飛び蹴りや回し蹴りで、これは高校生も多用している。しかし、ヤクザともなれば木刀を振りまわしての殴り合いが特徴で、これは迫力満点。実際の撮影は柔らかい棒でやっているのかもしれないが、それでも、あれだけ叩かれれば痛いはず。また、ヤクザ同士のケンカでも刃物は使わない、ましてや拳銃は使わないのが暗黙のルールらしいが……。

## ミノとのトラブルをどのように処理……？

ミノが監督して大ヒットした作品は、ヤクザの権力闘争を描いたものだったが、そのリアリティを追求すればするほど、「これはフィクションです」と断っても「どこかに題材があるのでは……？」と突っ込まれてくるもの……？ ミノ監督が描いた、現職の検事を殺害したことによってあるヤクザが幹部にのし上がっていくというストーリーは、実はビョンドウの生きザマにそっくり……？

そういえばビョンドウは、ヒョンジュにフラれて傷ついた時、酔っぱらった勢いでミノに対して、ファン会長と2人だけの秘密にしているある事件をしゃべったことがあったが、これはミノを無二の親友と信じていたから。ところが、ミノはそんなビョンドウから聞いた話を無断で映画に借用したの……？ いやいや、それはない。ビョンドウの話はあくまで参考で、ミノがつくった映画はあくまでオリジナルな脚本にもとづくもの……？

しかし、そんなミノの勝手な行動を許さないのがヤクザの掟。ビョンドウは、ミノとの直接の話し合いによって「カタをつけた」と思っていたのだが、ビョンドウの片

腕であるチョンスはミノに対してきっちりとケジメを……。さて、そんなヤクザの恐さを味わわされたミノの気持は、一体どんな風に動いてくるのだろうか……。ひょっとして、ビョンドゥと決別……。すると、その後の展開は……？

## 再開発には地上げがつきものだが……

東京で森ビルが実施したアークヒルズや六本木ヒルズそして表参道ヒルズ、さらに近時の東京ミッドタウン再開発などは、日本有数の民間再開発の成功例……。しかし、1980年代から90年代にかけて劇的な土地バブルとその崩壊を経験した日本人にとって、地価高騰と地上げを伴う再開発は華やかさの反面、うさん臭い裏側の面も……。小規模な再開発には特にそれが顕著だったし、やることがエゲツない大阪では、借家人を追い出すための度重なる脅迫めいた交渉はもちろん、家の中に臓物を投げ込む等の実力行使もあり、一大社会問題になったもの。

ところがこの映画を観ると、その場所はどこと特定できないものの、ヤクザ組織の黒幕であるファン会長が再開発事業全体の指揮をとっているし、50戸の分け前をエサとして地上げの実行部隊に抜擢されたビョンドゥたちは何とも露骨で非人道的な地上げ攻勢を展開している。人権活動が極端に抑圧されている中国では、北京オリンピッ



©2006 CJ Entertainment Inc. All Rights Reserved

クのためあるいは再開発のための土地取りあげに対して、徹底的に法的に対抗する弁護士や人権活動家が少ないのは仕方ないだろう。しかし、法治国家であり民主主義国家である韓国で、この映画でみられるような不当・違法な地上げ活動が展開され、しかもその再開発全体をヤクザの黒幕が仕切っていることに対して抗議し、対抗する弁護士はいないの？ 思わずそんなことを考えてしまったが……。

## 明智光秀と小早川秀秋はここにも……？

権力闘争には正攻法だけではなく、裏ワザ・足ワザ・寝ワザもある。そして場合によれば、織田信長に対する明智光秀や石田三成に対する小早川秀秋のような寝返り、裏切りだって……。

考えてみれば、ビョンドゥが今ファン会長の下で地上げに辣腕を振るえているのも、自分の上にいた兄貴分のサンチョルを下克上によって（？）やっつけたため……。今、ビョンドゥの疑惑の目はミノばかりに向いているが、ホントに危ないのは、「灯台下暗し」と言われるように自分の身内……？

「俺たち7人は家族だ！」「家族とは何だ！」とビョンドゥは調子のいいことばかり言っていたが、実はビョンドゥの片腕のチョンスにも大きな野望が……？

## 最後に残るのは、タイトルピッタリの空虚感……？

この映画は2時間20分の間いろいろと波瀾万丈の展開を見せてくれるから、決して飽きることはない。しかし、ヤバイ橋ばかり渡っているビョンドゥの姿を見てみると、いつかは、と思わざるをえないのは当然……。そしてその気持は、ホントは愛しているのだが、ヤクザに対する抵抗感をぬぐいきれないヒョンジュも同じ。

そんな中、次第に追い詰められていくビョンドゥの姿を見ながら、この映画はどんなエンディングを迎えるのだろうと考えていると、大体その想像はつくもの……。しかして、その結末は……？

そんなラストに至って、この映画の『卑劣な街』というタイトルがいかにかピッカリか、そしてヤクザはいくら一時的に羽振りがよくカッコ良くても、所詮空虚なものにすぎないことがよくわかるはず。したがって、映画鑑賞後、あなたに残る気持は空虚感のみ……？

2007(平成19)年7月20日記